

## 随 想

## 現代の反省

今井光雄\*



アポロ計画の開始以来3度目の月着陸が14号により果たされ、無事太平洋上で回収されたが、その数時間前に米国のロサンゼルス市周辺で大地震が発生し建物、道路などが崩壊するという惨事が起こった。原子力開発、宇宙開発、海洋開発などのビッグサイエンスに挑戦し、世界の科学技術のトップレベルを行

く米国で、このような惨事が起きたことは、見掛上成熟している近代文明の弱点を浮きぼりにした観がある。周知のようにアポロ計画は、米国の宇宙開発の中心課題であり、この計画推進のため巨額の費用と多数の科学者が投入されてきた。それは人間の自然に対する一つの挑戦であり、未知のものに対する探究心を代表していると思なされる。過去の例から見ても、人間の探究心は文明を発達させる上で不可欠な要素であり、それが原動力となつて、今日のような高度の科学技術水準に到達することができたといつて過言でない。アポロ計画はその一つの成果といえるが、反面高度に発達した文明のかげに、多くの弱点が内蔵され、その矛盾が露呈されつつあるのが現代の姿といえるかもしれない。

過去の科学技術の進歩の過程を振り返つてみると、それは試行錯誤の繰り返しであり、一つの試みが自然の許容する範囲のものであれば、その試みは成功するが、許容範囲を逸脱していると結果は必ず失敗に終わっている。

現在の科学技術もその域を出ず、自然は多くの未知の領域を残しながら人間の前に立ちはだかつている。しかしながら人間は過去の多くの成功により、ややもすれば勝利者のようなごう慢さを持ち、自然を征服したような錯覚にとらわれる。このような錯覚は自然の偉大さを忘却させ、自然に対する謙虚さを失わせ、ひいては科学技術を過信させる原因となる。人間が科学技術過信の上に安住し、その弱点を冷静に評価し、それに対処することを怠るとき、その弱点を衝いて災害が発生するのをしばしば経験する。卑近な例では、2年前から問題となつている大型タンカーの事故などもこの典型的なものであり、さきのロサンゼルス大地震による災害例なども、過信を戒める一つの警鐘といえる。

また最近文明の進歩に伴う自然環境の破壊が、社会問題として強く指摘されている。文明の進歩発達 は本来人類の繁栄につながるべきものであるが、その発達が大气汚染、水質汚濁などの一連の自然環境の破壊を促し、自然の循環の中で営まれている人間の生活を逆に脅かしている。文明の利器として生活

\* 川崎製鉄(株)専務取締役技術研究所長

に密着し活用されている自動車の排気ガスによる都市公害などはよい例である。このような矛盾を招来させた原因は、文明を発達させる過程で、自然との調和を第一義的に考慮しなかつたことによると考えられる。特に今日のような科学技術の急速に発達する時期には、その水準を高めるという顕在的な面のみ意が用いられやすく、潜在的な問題を十分に検討する努力が無視されがちである。その意味では人間の独善的な面が反映されていると見るべきかもしれないが、現状の破壊の進行は、自然の許容範囲を逸脱し、そのような独善を放置する余地がなくなるまでにいたっている。もしこの状態で推移すれば、自然環境の破壊は加速的に進行し、やがては人類の滅亡につながる重大問題にまで発展しかねないが、最近ようやくこの問題の認識が高まり、その対策が出されつつある。

鉄鋼業界においても、地域社会との協調を標榜し、公害防止に積極的な姿勢で取り組んでいる。本協会での共同研究の最重点テーマとして排煙脱硫計画を採り上げ、強力に推進する予定であり、当面その計画の成果が期待される。また長期的に見れば、化石燃料を主要なエネルギー源として成立する現在の製鉄体系を抜本的に見直さなければならぬ時期も近き将来予想される。そのようなエネルギー革命の一環として原子力製鉄の検討も進められ、次第にその活動も具体的になりつつある。

いずれにしても自然の破壊の進行を阻止し、一步進んで破壊された自然を回復するには膨大な費用と多くの科学者の協力を必要とする問題である。それは地味で華やかさを伴わないが、今日の文明の発達の原動力となつた人間の英知の結集があれば目的達成は可能であろう。